

「私はこの世ではとらえられないークレールをめぐるメルロ＝ポンティとハイデガー」
加國尚志（立命館大学）

「私はこの世ではとらえられない。なぜなら私は、未だ生まれざる者たちのもとに、そしてまた死せる者達のもとに住んでいるからだ。」

クレールの墓碑銘に刻まれたこの言葉にメルロ＝ポンティもハイデガーも、ともに彼らの存在への問いかけと重なりあうものを見つけたようだ。伝統的な存在概念を解体し、哲学史には未だ刻まれていない「野生の存在」あるいは十字抹消された「存在」への問いを立て、芸術に原初的な存在の自己現出の場を見ようとしていた。この両者はなぜクレールの言葉に強い関心を持ったのだろうか。

まず、セザンヌに遡ってみよう。メルロ＝ポンティは「絵画において思索する」というセザンヌの言葉を引用し、またハイデガーも、「もし誰かがセザンヌのように直接的に思索できたら」と語ったと伝えられる。絵画における「思索」と彼らが呼ぶものはいかなる事柄なのだろうか。ハイデガーは「セザンヌ」と題した詩を遺しているが、そこでは「庭師ヴァリエ」は一重襞(Einfalt)、すなわち存在論的差異の乗り越え(Überwindung der ontologische Differenz)の例として語られられている。「存在者」なしに「存在」を思索するという課題が、なぜセザンヌとともに、そしてまたクレールとともに語られるのか。メルロ＝ポンティは「庭師ヴァリエ」の塗り残しの白に「より一般的な存在」を象る機能を見る。モデュラシオンと空白が諸次元のトポロジックな生成を生み出すタブローに、哲学者達の視覚は何を見ているのだろうか。存在論的差異を維持し、哲学があくまで間接的にしか存在を語りえないことを主張するメルロ＝ポンティもまた、「存在者的仮面を持たない超越」としての「見えないもの」を語っている。存在者と存在の差異を維持しつつ、その共属の場が開示される場面がそこにあるのだとしたら、そこには作品における真理の創設としての現前化以上の事柄、作品そのものが非隠蔽性と隠蔽性の共属における現出と退隱の出来事の痕跡へと脱作品化していくことの看取があるのだろうか。メルロ＝ポンティのハイデガー読解において、隠蔽性(Verborgenheit)と脱去(Entzug)が重視され、しかし同時に、存在神論への批判において「無動機な生起」が語られるのを見るなら、「見えるもの」と「見えないもの」の交差配列とは、実体と対象の概念を放棄した生起と脱去との交差配列ではないだろうか。

両者のクレールへの関心は、このような背景を抜きには考えられない。0. ペゲラーに先立ってW. グローマンがハイデガーのGeviertとクレールの『自然研究の方法』における「私・汝・世界・大地」の相関とを指摘している通り、画家が表象の主体であることをやめ、絵画が表象＝再現であることをやめて、「見えないもの」を「見えるようにする」機能を担うとき、芸術はエイドスとしての「像」からも、エルゴンとしての「作品」からも解き放たれて、クレールの言うように「新しい自然性」(eine neue Natürlichkeit)として、「生成」(Genesis)という出来事そのものとなるのだとしたら、作品における真理の創設としての芸術から、Ereignisとしての芸術をクレールは垣間見ていた、ということなのだろうか。表象空間の解体の後でわたしたちはどのような空間に、場所に、世界に住むことになるのだろうか。

メルロ＝ポンティが「野生のロゴス」の生成の原理を見たクレールの色班は、セザン

又のモデュラシオンとドローネーの「同時性」とから、そして音楽的なポリフォニーから着想されているが、こうした同時的次元の生成原理そのものをメルロ＝ポンティが、『芸術作品の根源』ではなく、『根拠律』での深淵 (Abgrund) についての解釈、したがって存在神論への批判から得ている、ということは示唆的である。他方でメルロ＝ポンティは存在の無言の表明、自己形態化としての絵画について語りながら、眼に見える作品が「言葉」 (Parole) の「痕跡」 (trace) であるとも述べている。それは存在の唯一の「退隠」 (retrait) でもある。作品が Ereignis の場となると、同時にそこには Entzug、あるいは Enteignis の契機が秘められている、ということなのだろうか。

クレールをめぐるメルロ＝ポンティとハイデガーの言葉をたどりながら、同一性に先行する差異の共属の場の自己形態化としての芸術が作品概念や存在論的差異をも乗り越えて一つの自己形態化としての生成そのものへと接近するとき、形而上学の境域から解き放たれた芸術そのものの十字抹消が開かれるのだろうか。そして、そのような「芸術」＝技術においては、メルロ＝ポンティが構成的空虚と呼んだ、見えないものの水準、一種の沈黙、退隠の動きとともに、措定としてのポイエーシスを越えた見えるものの解放がありうる、ということなのだろうか。

ここでは十分に答えることのできないこうした問いとともにのみ、クレールが遺した「住む」ことの意味が展望できるように思われる。